

Title	「ピンヤ・サガイン時代」
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 20 p.153-p.166
Issue Date	1968-12-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80330
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「ピンヤ・サガイン時代」

服 部 正 一

“Pinya-Sagaing Period”

by Masaichi Hattori

နိ ဒါန်း

န မေတ္တဿာဂံ တေဝအရဟတေဝသမ္ဘာသမ္ဘာ ခုဿ

ကျွန်တော်သည် "ဂဏ္ဍဟို" (အတွဲဝဂ) တွင် ရေးသားခဲ့ဘူးသော "ပုဂံခေတ်ပျက်စီးခမ်း" ကိုဆက်လက်၍ ဆောင်းပါး ခွဲရေးသားမည်ဖြစ်ရ၍ "ပင်းယန့်ငဲ့စစ်ကိုင်းခေတ်" ဟူသောခေါင်းစဉ်ဖြင့် ထပ်လောင်းတော်ပြုအပ်ပါသည်။

ပင်းယန့်ငဲ့စစ်ကိုင်းခေတ်မရောက်မှီကလက်သော် မြန်မာရာဇဝင် ခွဲဖြစ်ပေ၍ ချဲ့သောနန်း ဆက်အရေးတော်ပုံများမှာ နားလည်ရန်လွယ်ကူပါသော်လည်း ၊ ၎င်းခေတ်ခွဲဖြစ်ပျက်ပေ၍ ထွက်သော အကြောင်းအရာများမှာ မူရှုတ်ထွေးပေလည်သောအရေးကိစ္စများ နှင့်ပြည့်စုံပါလိမ့်မည်။

၎င်းခေတ်ခွဲရှမ်းလူမျိုးများသည် မြန်မာနယ်ဘက်သို့ တစတစ ဝင်ရောက်လာကာ အင်အားတိုးချဲ့ခဲ့သည့် လောက်မြန်မာများ၏ တန်ခိုး ဩဇာအာဏာ စက်မှာဆုတ်ယုတ်သွားလေရ၍ ပင်းယမင်း ဆက်န့်ငဲ့စစ်ကိုင်းမင်း ဆက်န့်စစ်ဆက်ကို ရှမ်းလူမျိုးအရင်းအမြစ်မှ ပေါက်ရောက်သော မင်းများ သာနန်းတက်နန်း စံပြုလုပ်ကြလေသည်။

ဘုရင်မင်း များ ဇာယာင်ပွဲ တော်အခမ်း အနား များ ကို ကား
ပုဂံခေတ်အခါ၌ကဲ့သို့ရှေး ဓလေ့အတိုင်း ကျင်း ပဏ္ဍိတလေသည်။ စေတီ
ပုထိုး များ ကိုလည်း အစဉ်အတိုင်း တည်ဆောက်ကြ သော်လည်း ၊ ပုဂံ
ခေတ်၌ကဲ့သို့မကီး မကျယ်မတင့်မတယ်ဖြစ်ကြ လေသည်။

ပင်း ယနန်း ဆက်နွှင်စစ်ကိုင်း နန်း ဆက်စဉ်း စိမ့်ကိုခံစား ခဲ့
ကြသောမင်း များ မှာကား တမိဝမ်း ကွဲမဟုတ်သော ကြောင့် အ
ချင်း ချင်း အမြဲပင်ရန်မူကြ လေသည်။ နန်း စံသက်တန်း များ မှာတို
သော်လည်း ဘုန်း တော်ကြီး ဇွဲငါး စီး ဂွင်ကျော်စွာမင်း အကြောင်း
ကိုမူအနည်း ငယ်တော်ပြသသည့်ဟုယူဆမိပါသည်။

၄င်း ပင်း ယ-စစ်ကိုင်း ခေတ်သည်ပုဂံမင်း ဆက်နွှင်အင်း ဝ
ဆက်ကြား တွင်တည်နေ၍ ၊ ဆက်သွယ်ရတံတား သဖွယ်အကျိုး ဆောင်
သည့်မြန်မာရတနာဝင်၌ သော်သေး ဖွဲသောအကြောင်း အရတုဆိုရ
ငြား သော်လည်း ၊ မှတ်တမ်း တင်ထိုက်သောမြန်မာ-ဂွမ်း အချက်
အရတုများ ပါဝင်ရှိကြောင်း ရေးသား ရပါသည်။ ။

ま え が き

本論は、学報第18号の「バガンの滅亡」の続編であって、それまでのビルマ史は比較的容易に理解し得られるけれども、この時代よりビルマ史にはやや複雑な事情が混入されてくる。この時代はビルマ民族がシャン族の膨張によってその勢力が衰え、ピンヤ・サガイン両王家はともにシャン族出身者によって占められた。依然としてバガン王家の式典等の慣習は守られていたし、またバゴダの建立も続けられてはいたが、バガン時代のそれとは比肩し得なかった。ピンヤ王家とサガイン王家の間には養子と実子の関係にあったため互いに反目抗争が繰返えされた。この時代に現われた人物の中では、即位期間は短命であつたけれども、五頭の白象主チョーゾワの人物についてやや見るべきものがあると思う。このピンヤ・サガイン時代は、バガン王朝とインワ王朝との間の橋渡しとなったビルマ史の一小部分であるが、見のがすことのできないビルマ対シャン族間の問題が含まれている。

ピンヤ（1312～1364）とサガイン（1315～1364）時代。
ビルマにおけるシャン族の全盛時代。

これまで論じてきたビルマ史を区分すれば、タガウン時代、ブローム時代（または、タレケッタラ時代）、及びパガン時代であるが、パガン時代をなお小区分すれば、アノーヤター王以前のパガン時代を古パガン時代とそれ以後を新パガン時代に分け、更に新パガン時代を全盛時代（Tet-hket）と滅亡時代（Pyet-hket）とに分けて考えることができる。これらの時代区分は比較的簡単であるが、パガン王朝が亡びて後はピンヤとサガインがそれぞれ時代を同じくしてビルマ国を支配した。

ピンヤ王家は1312年より1364年までの6代とサガイン王家は1315年より1364年まで7代にわたって約50年間互いに勢力を競い合った。その後、インワ（In: wa, または Ava）王朝が1365年に建設されたのであるから、パガンがいまだ完全に亡びていなかった頃にすでにこれら王朝の勃興が芽生えていたのである。

1287年の中国（雲南）軍によるビルマ遠征はパガン王朝を崩壊に導いた（学報18号84頁参照）が、それ以上何らの恒久的な効果はもたらさなかった。パガン王朝の滅亡に代って若干の小王廷が出現して互いに闘争し合いつつ、ビルマ国は内乱に衰えて行った。仏教はすたれ、パゴダの建立は依然として続けられてはいたが、とうていパガンのそれには比肩し得なかった。

パガン王国を滅ぼしたのは中国軍ではなかった。なるほど彼らの来襲の下に一時は崩壊したが、もしパガンが真の統治の府であったならば、その再興は決して不可能ではなかったはずである。何故ならば中国はパガン再興のためにはあらゆる支援を惜しまなかったことがうかがわれるからである。要するに、パガンは一王朝の政権を以てしては如何ともし難い民族移動の波に凌われてしまったのである。というのは、国内にうち続く内訌よりは、むしろインド・シナ全土を風靡しつつあった一つの民族運動、即ち、シャン族の移動であった。

シャン族について。

現在のシャン、ラオス、シャム等の諸族は中国人と同種族に属するものであって、タイ（T'ai）族として知られている。彼らは古く西紀前6世紀頃より揚子江以南の蛮族としてしばしば中国の記録に言及されている、とホールは述べている。（Burma by D.G.E.Hall, p.28）西暦初期にはタイ族は中国に隷属していたが、しばしば反乱を起し、独立を主張する気配を示した。7世紀の中葉頃彼らは強力な南詔国を建設して、ビルマでは古パガン時代の初期すでにビルマ文化に少なからざる影響を及ぼしていることはすでに述べた（学報12号、103頁）。タイ族は一方では中国の東南に進路を向けており、また他方では、ビルマの北部シャン州にも出現しているのである。

彼らは南に、東に、また西へと拡がって行った。1229年、彼らはブラマプトラ河沿いにアッサムのアホム（Ahom）または（Ahun）王国を建設したが、彼らはタイ族中最も西方に在るもので

、アッサムに侵入後、インド化し、その固有の言語を失ってしまった。また同じ頃、彼らはテナッセルムにも現われている。1350年にはシャム王国 (Yō:dyā: pyi = タイ国) を建設した。シャムはシャンの同義語であって、事実シャムはシャン族諸国中の最大のものに他ならない。ビルマにおいては彼らはビルマ全土を席捲してビルマ、タライン両族を圧倒した。本質的に分裂繁殖的性質を有し、ビルマでは普通、“Shan: myō: thon: hse” (シャン30種族) として知られている。即ち Lin:, Thet, Chin:, Hkun, Yin, Kadū:, Myan, Akyaw, Gin, Shan: (10); Zawā, Myet-hnā-mē:, Kathī:, Yemī: htwet, Kayet, Lawa, Law, Pan: laung, Tayet, Ywun: (20); Dhanu, Bha-ū, Kayin, Kachin, Ganaw, Yawn, Lawaik, Tayot, Yō: dyā:, Anè (30) 等である。(Thutethana-thayot-pya, p. 464)

このように、インドシナ半島一帯を荒し回ったシャン族を中世ヨーロッパにおけるゲルマン民族に例えるならば、やや消極的に彼らの進出を許したビルマ族はケルト族にたとえられよう。

前述した(学報18号, 85—86頁) シャン族3兄弟はイラワヂ河に沿った地域をそれぞれ統治したが、昔の王朝の一部を支配したにすぎない。北部シャン州は独立していたし、南部でも彼らの威力はプロームを越えなかった。タウンゲー地方は王国から分離していた。3兄弟は正しい政治を施したから、数年間国は平穏であった。

シャン兄弟によって建てられた宗教的遺物は古跡ミンザインに今はくづれかかっている“ミョーレー・パー” (Myo-le-hpayā:) と“ボードーム” (Pawdawmū) と現在呼ばれている仏像が見出される。その碑文によれば、シャン兄弟がミンザインにて統治していた頃、即ち1304年に彼らが礼拝していた、ということである。(U Min Han, p. 152—153)

シャン族3兄弟の末弟ティハトウ (1298年—1322年)

前述したシャン族3兄弟(学報18号85, 86頁) がそれぞれ彼らの領土を支配するようになってから5年経過した時、まん中の兄ヤーザティンヂャンが死し、数年を経て長兄のアティンカーも末弟ティハトウに毒殺された。ティハトウは2人の兄の領土を全部占領して、1310年自らはピンレーに在りてビルマを支配した。

ピンヤ王朝の興り

パガン王家のチョーゾ王が廃位になった1298年より、ティハトウは兄たちと王位を競って上述の理由にて自らが支配するに至った。1312年ティハトウは前兆によってインワの近くにピンヤ王朝を建設した。

ピンヤの都を創めるに際して、フマンナン・ヤーザウインによれば、シュエジゴン・パゴダ(学報12号, 111頁—112頁) を建立した場所を掘った時(植物の) 茎, 枝, 葉, 果実等と共に黄金花の樹 (Shwe pan: bin) が見つかったので、その都をパンヤ (Pan:-ya=「花が見つかった」の意) と呼んだ。時を経るうちに、パンヤがピンヤと訛った。即ち, Pan:-ya (ya は ya-gauk の ya) →Pan: ya (ya は ya-pet-let の ya) →Pin: ya (ya は ya-pet-let の ya) となった。そしてその都のパーリ語の呼び名はウイザヤプール (Wizayapūr=「勝利の都」) と云った。彼は

その場所にジゴンドーバゴダを建立した。

テイハトウがピンヤを都と定めたのには次の理由があげられるであろう。

まず、ビルマで米の産地として最良の地域はデルタ地帯とチャウセ地方であるが、デルタ地帯は下ビルマにあるためあまり遠隔の地であり、その上タライン族の支配下にあったので、この地はさておき、チャウセ地方の米倉地帯に眼を向けたが、彼らが生活してゆくに欠くことのできないイラワヂ河からはチャウセもかなり隔っていた。そこで、イラワヂ河に臨み、なおチャウセ地方の米をも入手できる場所を物色することが最善の方法であると考えられた。その候補地としてはサガイン地方のインワが最適であった。チャウセの米はミンゲ河を下って水路によってインワへ運ぶことができる。しかるに、占いの結果、インワは不吉の地とされたので、1312年テイハトウはインワの地を捨てて、インワに近いピンヤの地を吉祥の場所として選んだ。

都の建設が終了して、新宮廷開きの式典(Nan: hpwin. Minglā)を催すことになったが、テイハトウ王には式典の手順がわからなかった。フマンナンヤーザウイン(408頁)によれば、彼はパガンのポアソー女王を招いた。女王は云うに、「ピョー族の子たち(シャン族3兄弟を指す、テイハトウはその末弟、学報18号、85, 86頁)は長年の栄華に酔い、私のことなどは忘れていたが、今になって私のことを思い出したのか」と云って、その式典に出ようとしなかった。そこでテイハトウ王は重ねて彼女の気嫌をとり王自らが船に乗って彼女を出迎えに行き、彼女の列席を取計らった。そして宮廷開きの式と同時に、パガン先王の様式を採り入れて、ビルマ王家を象徴する傘をさす式典(Hti: hsaung: Mingalā)及び注水式(Bhitheit Minglā, 学報17号、72頁)等をも盛大に挙行し、王は“Thiritribhawanāditrā Pawara Thihathūr Dhammarāzā”という称号を受けた。余りにも豪華な儀式だったので、ポアソー女王もそれをほめ讃え、「このような立派な儀式にふさわしい贈物は私には何も持ち合わせがない」と云って、アノーヤター王時代より伝わるShwe-thauk-ye-tin(飲水のコップを置く台)と金製のベルトを贈った。それに対しテイハトウ王もポアソー女王に多くの品物を返礼として贈り届けた。

このようにして、テイハトウの王位を1298年より数え、ピンヤの創始を1312年より数えることができる。

今や彼はピンヤに首都をもち、イラワヂ河畔における唯一人のシャン族の支配者となった。その後、彼の子孫は2世紀にわたって上ビルマを支配した。その版図は西はシュエボ地方のミエドウ及びモンユア地方のバンヂよりシュエボ近くまで、南はプロームに至り、東はパコック地方のラウンシエよりチャウセに至る範囲に及んだ。しかし、この範囲においてすら彼らの威令が行なわれることは稀れで、依然として国内到る所動揺していた。サガイン、サグ、タウンドウインダー、タウングー等の町々はそれぞれ縦に行動していた。しかし、この混乱には、単なる流賊の跳梁以上の何ものかがあった。それは一つの民族移動、即ちビルマの平原地帯を旨とするシャン族の移住の結果に他ならなかった。

以前、パガン王家を駆逐した時、シャン族3兄弟はパガン王家の妃や後宮を奪って彼らと通婚した。フマンナン・ヤーザウインによれば、パガン王家のチョーゾワ王はナラティハパテ王の娘ミン・ソーウー（Min:-saw-ū:）と結婚し、彼女が懐妊して3カ月経った頃、チョーゾワ王は廃位された。そしてシャン3兄弟の末弟ティハトウがピンヤの王位に即いた時、そのミン・ソーウーと結婚して*ポワソー（Hpwā: saw）という名をあたえて王妃とした。そして、*ウザナー（Uzanā）*チョーゾワ（Kyawzwā）、ノーヤター（Nawyahtā）という3人の男児をもうけた。そして、ウザナーを王位継承者に任じ、チョーゾアにはピンレーの地を、ノーヤターにはシシヤーの地をそれぞれ与えた。

*ピンヤの初代王ティハトウの王妃ポアソーとパガン王家52代のナラティハパテ王の王妃ポアソーとは同名別人。

*ティハトウの子でピンヤの王位継承者に任じられたウザナーは「アーサー・フェアーのビルマ史」ではパガン王家のチョーゾフ王とミン・ソーウー（後のポアソー王妃）との間に生れた子となっている。（アーサー・フェアー、岡村武雄氏訳ビルマ史、88頁）ナラティハパテ王の長子でパセインの太守、及び、パガン王朝51代の王も、ウザナーといって同名別人であった。

ティハトウ王の次男、及び、パガン王朝53代の王も同名で、チョーゾワといった。

ビルマ人の名前には姓と氏の区別がないために、王族のみでなく、庶民にいたっても同名の人が大そう多い。名前は簡単すぎると返って複雑になるものである。

ティハトウ王には前述の3人の息子、ウザナー、チョーゾワ、ノーヤターのほかに、末弟でアテインカヤー・ソーユン（Athin-hkayā Saw-yun:）という子がいて、継子と実子間には必然的な憎しみがやがて爆発せんとしていた。末弟ソーユンは王族の出ではなく北方リンイン村の住民の娘をティハトウ王が北殿の女王につかせて、ヤタナーボン女王と呼び、彼女との間にできた子であった。このように王族の出でもなく、末子でもあって、勢力がなかったので、父ティハトウ王は彼に対して一そう不憐に思い、愛着を感じて、大そう意を配っていたと思われる。

ピンヤの都を建設して、2年を経た時、サモン河を流れてきた牝の白象の死体を見つけ、ティハトウ王はこれを学者たちと相談して、これに黄金の鞍をつけて乗り、Tazi:-shin（「一頭の（白象）主」）の称号を名乗った。白象はたとえ死体であってもこのように珍重された。（白象については後述する。）

サガイン王朝の勃興

その翌年、即ち1315年に、ティハトウ王は北殿の女王ヤタナーボンより生れた末弟アテインカヤー・ソーユンに象・馬・兵士等と共にサガインの都をあたえた。サガインの地名は古くタガウ

ン時代の末期にさかのぼり、マハー・タムバワとスラ・タムダワという盲目の双生の王子が女鬼サندانキーに出会った場所がサガインの地であって（学報12号，99頁—100頁），その時，アカシアの樹の枝がイラワヂ河の上へ拡がりたれさがっていた，という故事によるのであって，Sit (pin) = アカシアの樹 + kaing: = 枝，Sit-kaing: → Sagaing: に訛ったのである。その後，Sit-pyin-gyi: kaing: gaing: shi yā ayat Sagaing: myo (アカシアの枝おおうサガインの都) と呼ばれるようになった。

ウザナーはピンヤに在りて，またソーユンはサガインに在りて，互いに軍隊を養成していたが，その後，父王テイハトウはソーユンに彼の兄たちがサガイン側に対して陰謀をたくらんでいるという情報を秘かにあたえたので，ソーユンは守りを固め，彼らの攻撃によく攻守することができた。この戦闘において，ウ・オン・マウンによれば，アリー教僧たち（学報12，107—108頁）はアテインカヤー・ソーユンを援けていたことが記されていることより，アリー教僧がその頃でも消滅していなかったことが知られる。このようにして，アテインカヤー・ソーユンは僅か14才にしてサガイン王朝の初代の王としてその都を支配した。

ハーヴィイによれば，テイハトウ王は彼の息子たちを互いに反目抗争させ，夷を以て夷を征するという以上にもつと王者にふさわしい智恵にとぼしかった。例えば，彼は自分の息子甲に命じて同じく息子乙の町を攻めしめ，しかも一方では乙に対して，甲の兵が今汝の都に向いつつあると警告する，というような方法を用いた（p. 61），と述べられている。また，ビルマ史家によって書かれたもののうちにも同じように述べられているものもある。

しかし，テイハトウ王にはピンヤ側のウザナー（パガン王家チョーゾワと王妃ミン・ソーウの間にできた子と想像される）に対するよりも実子ソーユンの方へより多くの愛情が傾いていたのではないかと考えられる。

その後，ソーユンはパガン王家のチョーゾワ王の娘ソー・フナウンを王妃として，長女ソーミン・コードーデー，長男チャゾワ，次男ノーヤター・ミンイエ，末弟タヤピヤー・ンゲという4人の子の父となった。

上述した通り，パガンが亡びて，今やピンヤとサガインが勢力を競いつつ，その興亡が続けられて行つた。1338年にシャン族たちはビルマ国内に入り込み，そこに永住せんとかまえた。そして次第に勢力を増し，シャン族，又は，シャン系ビルマ族の王朝が出現して，ミンザイン，ピンヤ，サガイン等の北部ビルマの地域にかなりの期間支配することになった。

タウングー及びタウンドウインとの関係。

かつてタウングーを支配していたタウオンゲ（Thawon-ge）は誼みを通じないという理由によってウザナーとチョーゾワを大軍を以て攻めたが敗北し，兄弟2人に朝貢を約束した。

タウンドウインの支配者プウィンラ・ウ・テイハパテ（Pwin-hla-ū:-Thihapate）が反乱を起す計画のある気配を知って，もしタウンドウインに反乱が起れば，タウングーもこれに同調するであろうと憂えて，テイハトウ王はプウィンラ・ウ・テイハパテに北殿の女王の娘ソーパレを嫁がせた。

一頭の白象主テイハトウ王は王として術策に巧みな人であった。1322年この世を去ったので、ウザナーが彼の後を継いで王位に即いた。

ンガズイーシン・チョーゾワ（5頭の白象主チョーゾワ）

(Ngā: zī: shin-Kyawzwā, 1 3 4 2 ~ 1 3 5 0)

ウザナー王は20年間（1322—1342）ピンヤの統治に当たったが、単なる名義上の王に過ぎなかった。彼はサガー・コンネチャウン（Sagā:-hkuhnit-kyauṅ:）とも名づけられたが、それは彼がサガー・コンネチャウン（寺院）を献じたという理由からである。その後、彼は魔王となり隠遁した。そこで彼の弟チョーゾワがその後を継いで王位に即き、ウザナー王が建立したサガー・コンネチャウンにて供養を行い、五頭の白象主（Ngā: zī: Shin）の称号を得た。それは彼の優れた称号と系統上旧王朝の要求の宣言であった。

五頭の白象主チョーゾワ王はパガン王家ソーニツ王（学報18号、87頁）の娘を南殿の女王に任じ、彼女との間にウザナー・ピヤウン（Uzanā-pyaung）、チョーゾワンゲ（Kyawzwā-nge）、ナラトウ（Narathū）の3人の男子と3人の娘が生れた。

白象について。

シュエヨーは彼の「ビルマ民族誌」の中でビルマの国王が白象を所有することに重大な意義を認めて、次のように述べている。

「仏陀が地上に生れて、仏教を説き、衆生を済度するために摩耶夫人の胎内に白象を形どってはいられた。天上界の象（Hsaddan Hsin）は釈迦の種々な生活の化身であって、白象は特殊な天賦の才能に恵れていた。従って、これを所有すればSekyawala（=Sans. Maha Chakra Varthi Raja「大車輪を廻す大王」）として、または、人生の盛衰期間、即ち、athin-hkye（＝一つの単位と140の零とによって表わされる年数）の極限に達した時において、一周年に一度現われる支配者であることを示す七つの宝の一つである。故に白象を所有することは疑いもなく宇宙を支配する者の印であり、象徴であった。従って、ビルマでは国王は、眼に見えぬ神が彼の王権の正当性を承認している証拠として、その治世中にこのような宝物を手に入れることを切望したのである。

ビルマの大河 *イラワヂの名は帝釈天（Thagyā: min:）のエラワタ象（Erawata Hsin）に因んだもので、彼の子孫たちが住むに適した場所であることを示している。」（ビルマ民族誌、557頁）

*イラワヂ河の語源に関しては、他に、^ニエヤバタ龍の住む所であったが故にエヤワディ（Eyāwadi, 英語では Irrawaddy）と名付く。（Judson's Bur-Eng Dict., p. 160）ともあれば、また、^ニエヤワタという名の植物（みかんの樹属）がその岸辺に繁茂しているためにかく名付けられた。（Porāna kahtā Abhidhān, p. 68）とも云われている。要するに、エラワタ、エヤバタ、エヤワタ等すべてエヤワディの発音に関係している。

また、Chas. Duroiselle の Vessantara Jataka Vatthu の註釈書の24頁に白象に関して、Max

Müller より引用せる中に、「象は仏教徒にとって忍耐と自製の象徴である。仏陀自身も Maha Naga (=the Great Elephant) と名づけられるが、この呼称は仏陀が象の形をして地上に降られたこと、及び sudanta= (象の如く) 従順な) であったという理由によるのである。」と記されている。

ヒマラヤの深山に棲み、空中を飛び廻って、その敵を容易に征服する力を持つと云われる架空のウポサタ象 (Upasahta Hsin) は未来仏がこの世に生れる時はじめて人間の世界に現われるであろうというのも、実に仏教徒のビルマ人がもつ信仰である。

当時、ビルマにおいてはすべての象は王の所有物であって、白象を見つけるためには王自身及び王子・大臣・高官・将軍・兵士・国民すべてがジャングルの奥深くへ探し求めに行くのである。そして、たとえ雪のように白い象が見つかって、それが必らずしも白象だと決定されるとは限らない。白象を決定することは一つの学問であって、象の身体各部分に関して詳細に調査され、その名に相応しいものが白象に決定されるのである。

象に関して次の10種類が Thutethanathayup pya Abhidhān, p. 2 1 3—1 4 に記されている。

- (1) Kālāwaka 象=人間の10倍の力をもつ黒象。
- (2) Gingeya 象=ガンジス河の岸辺に棲み、カーラーワカ象の10倍の力をもつ。
- (3) Pandhara 象=薄黄色の皮膚で、ギンゲヤ象の10倍の力をもつ。
- (4) Tanba 象=赤色を帯びた縞を有し、パンダラ象の10倍の力をもつ。
- (5) Pingala 象=灰色の縞があって、タンバ象の10倍の力をもつ。
- (6) Gandha 象=じや香の芳香を発すると云われ、ピンガラ象の10倍の力をもつ。
- (7) Mingala 象=優れてりっぱな象で儀式の際国王の乗用とされ、ガンダ象の10倍の力をもつ。
- (8) Hema 象=黄金色の象で、ミンガラ象の10倍の力をもつ。
- (9) Upasahta 象=空を飛ぶ架空の象で、ヘマ象の10倍の力をもつ。

なお、この象に関してはパーリ語各詞辞典撮要 (Abhidhanappa-dīpikasūci) に “Upagantva arayo upasatiti upasatho” (諸々の敵に接近しつつ坐するが故に近侍者と名づく) —

Dhammapada Atthakathā III p. 2 4 8 によれば、良象は六牙種か布薩種から生ずとあり、Upasahta 象は転輪聖王の坐する宝象で全身白く神力あり、空中をも飛ぶことができる。と — (村田先生訳註)

- (10) Hsaddan 象=6牙より6つの色又は光を発する白象で、ウポサタ象の10倍の力をもつ。
- すべての象のうちで最も秀れ、ヒマラヤの湖の岸辺に棲み、8万頭の象を従える。

昔、国王に献ずる白象を決定するために学者たちによって用いられていた種々な試験方法が「ビルマ民族誌」に次のように述べられている。一つの方法は、白象は後の足指に四本でなく五本の爪をもたねばならない。しかし、五本の爪をもった象が偶然にも黒い象である場合があった。それは罪業によって品質の落ちた白象であって、前世において Nat-hsō: (悪霊) の下で偽っていたために、白象に与えられる名誉を受ける資格を失ったと考えられる。もう一つの方法は、も

しそれが所謂「白象」であるならば、これに水を注げば赤くなる。黒い象に水を注げば以前より益々黒くなる、というのである。四足の指に二十本の爪をもち、また洗うと赤くなる象なら少し位い黒ずんでいようと白象の名誉と特典があたえられる場合もあった。次に、眼は黄色で、外側の環帯は赤味がかっていないなければならない。また、牙については、白く軟かでありつばなものでなければならない。Thutethanathayup-pya-Abhidhān, p. 213 には、牙について次の4種類の象があげられている。

- (1) Haing-myō: =十分成長しているけれども牙をもたない象。
- (2) Han-myō: =細くて短い牙をもっている象。
- (3) Ti-myō: =唯一本の牙をもっている象。
- (4) Tan-myō: =二本の牙をもっている象。

たとえ、捜索隊が象を捕えてきても、試験の結果、尻尾が短かすぎたり、眼の位置が間違っていたり、赤い輪が欠けていたり、身体のだこかに傷痕があったりして、適当な候補者となり得るはずの象が不合格になる場合が多く、所謂「白象」が発見されることは本当に稀れである。

アラウンシートウ王（学報16号、67頁参照）が象狩りに出た場面が『マンナンヤーザウイン』（329—330頁）に次のように記されている。

「アラウンシートウ大王は威徳と権勢を具えていた。彼は象馬操術や弓術に秀いでた。かつて大臣高官たちを従えて、マトンの森にて象遊びに興じた。彼は 'ti', 'tan', 'haing', 'han' 等の完全無疵の若い牝象を1千頭以上を得た。また、パンダウンの森では7百頭以上の同上の牝象を獲得した。また、タロッの森では、象の牙をつかんで象の背に乗り、ティントウエの綱のわなによって7百頭以上の牝象を捕獲し、ンガサウンヂャンの森で象狩りをした時には1百頭以上の牝象を捕えた。……」

五頭の白象主チョーゾワ王は王位に上る前、ピンレーを統治していた頃、部下のンガキンニョ(Nga-hkin-nyo)に命じて、サガインを支配していた末弟のアテインカヤー・ソーユン（A-tin-ka-ya-so-yeun）を撃たせようとした。宮廷に忍び込んだンガキンニョは3日間食事をとっていなかったので、空腹のあまりサガインの宮廷でナツに供えてあった食物を食べた。そして、自分に一碗の食事の情けをかけてくれた人を撃つべきでないと感じて、ソーユンを撃たずに、ソーユンが用いていたルビーをちりばめた王刀をもって帰ってきた。チョーゾワ王はその事情を知り、ただ一碗の恩をも知る部下のンガキンニョをほめ、彼に褒美をあたえた。

このことによってビルマ人の美德の一つをうかがい知ることができる。このような例はビルマ人の間では度々見聞するところである。しかし、これ程恩義を感じる者がなぜ恩人の王刀をもって（盗んで）きたか、恐らく敵の王刀をもち帰ったことによって主人に自分の功を認めてもらいたいという気持（功名心）もあったからであろうと察せられる。

チョーゾワ王は文学に興味をもち、戦に関する詩を作ったことは有名である。

この頃にもなおアリー僧が残存していたことに関して、次の事がフマンナン・ヤーザウインに述べられている。「ある日、五頭の白象主（チョーゾワ王）が食事をしようとしていた時、一人の僧を装う者が僧侶のもつべき *8 つ道具を携えて、王の前に立った。王は何のために来たかと尋ねると、食事を乞うためであると云ったので、信仰篤い王は自分のために皿に盛られてあったすべてを彼に施こし、満足して、「かの僧は正后近くになったので食を乞いに来た。りっぱな僧にちがいない。朕に功德を積ませるために施しを受けに来たのであらう」と云って、一人の家来に僧の後を追って見張らせた。すると、それは真の僧侶ではなく、偽りの僧であって、彼の *妻が先に食事の鉢に手をのばしてとるのを家来は見た。家来は考えた。もし本当のことを王に話せば、敬けんな王の信仰心を傷つけることになるであらう。そして、また自分の面目も失うことになる。またその偽僧も罰を免がれまいであらう。それ故、王の心を傷つけず、自分も面目を失わず、僧も罪に落ちることなきようにと考えて、王の元に帰り、「私が見た限りでは、その僧は姿を隠してしまわれました。」と王に言上した。王は思い通りに間違いなかったと満足して、腕をのばしてくつろいだ、ということである。（Hman nan: yāza win Vol. I, p. 419）

*僧侶のもつ8つ道具（Parikkhayā-shit-bā:）とは、肩を覆う僧の外套（dukut）・上半身の衣（Ko-wot）・下部の衣（thin:-baing）・托鉢（thabeit）・帯（hkā:-ban:）・短い柄のおの（Pè-hkwop）・針（ap）・ひしやく（ye-sit）のことをいう。（Jud. Bur-Eng Dict., p. 624）

*ビルマの仏教僧はすべて小乗仏教の戒めを守っているので、妻帯することは戒律を破ることになり、従って妻と食事をすることはあり得ない。ところが、アリー僧は学報12号（107—108頁）にも述べた通り、妻帯、飲酒、その他仏教で禁じられてあることとは一切無関係であった。

同じその日、大そうりっぱな一頭の馬が献上されてきた。王はそれが彼の功德の結果の現われであると云って、一人の家来をその馬に乗せて馳らせたところ、乗馬者の白いターバンがとうもろこし畠の上を白さが飛んで行くように見えた。140マイル程も距ったピンヤとタウンドウインダーの間を一日のうちに走ることができたという。その馬を Teintaik-kwun-myū:（積雲の中を馳けるもの）と名付けた。（Hman-Nan: Yāza-win Vol. I, p. 430）

チョーゾワ王は多くの太守をお茶の催しに接待することを習しとしていた。かつて、王はうっかりして、ヤメデインの太守テイハパテの鉢を樹の葉で覆うのを忘れていたのをテイハパテは大いに恥じ、大そう立腹して、チョーゾワ王に対し反乱の気配を示した。王はそれを聞き知った時、それは全く彼の不注意であったことを認めて、テイハパテをなだめ、わびの印として彼にオンバウン・ミン・ネッチョーという一頭の良馬を送った。

ピンヤとサガインの滅亡。

ピンヤでは、五頭の白象主チョーゾワ王は8年間統治に当った後この世を去った。その後彼の三人息子のうち中の兄 *チョーゾワ ンゲ（Kyawzwā-nge, 1350—1359）が美貌のソーウンマ（Saw-ummā）を妃として王位に即いた。

チョーゾワングの時代には、仏典に通じたサトゥリンガバラ (Sa hturingabala) 大臣がサンスクリット語で書かれた三蔵經の註釈書を著した。1358年タウンゲーを支配していたテインガパが反乱を起し、その年イエフロエ3カ村を侵した。その翌年1359年に、チョーゾワング王が死去したので、その弟ナラトウ (Narathū, 1359—1364) は兄の妃ソーウンマと結婚して王位に即いた。

*チョーゾワングはその父王チョーゾワと元来同じ名前で、チョーゾワと呼ばれていたが、父の名と区別するためにチョーゾワング (小チョーゾワ)、または、タードーチョーゾワ (息子のチョーゾワ) と呼ばれており、父のチョーゾワは普通、五頭の白象主チョーゾワと呼ばれている。

サガイン王朝の創設者アテインカヤー・ソーユンは7年の統治後、3人の息子と1人の娘を残して亡くなったが、彼の異母兄タヤーピャーデー (Tayā-hpyā: gyī:) が後を継ぎ、14年間統治したが、住民の反感を買ったという理由によって、彼の子シュエダウンテツ (Shwe-daung-tet) は女王の一人と相談し、またアナンダパチャン大臣の援けによって父を退位せしめ、鉄鎖をはめて彼をとち込めた。

その後、シュエダウンテツに対抗して、タヤーピャーデーの妃は高官たちに賄賂を贈り一団を結集させ、機を窺って、シュエダウンテツを殺害した。その時、シュエダウンテツの大臣アナンダパチャンがこの報せを聞き、直ちにタヤーピャーデーを撃った。それからアテインカヤー・ソーユンの長子チャゾワ (Kyazwā) を隠してあった場所からアナンダパチャン大臣が連れ出し、彼を王位に即かせた。彼アナンダパチャン大臣はパガン王朝時代のヤザテインジャン大臣 (学報17号, 82—84頁) と比較すべき人であろう。

上述した通り、シュエダウンテツが王位に即いて、3年して亡びた後、チャゾワが王になり、アナンダパチャン大臣にトウバヤツ (Thubhayat) という名をあたえて将軍に任じた。チャゾワ王は10年間統治して死し、彼の2人の兄弟ノーヤター・ミンイエとタヤーピャーゲが相次いで後を継ぎ、3年間の統治後、亡くなった。その間何ら特筆すべき事件は起らなかった。

アテインカヤー・ソーユンの娘ソーミン・コードーデーは昔のタガウン王家の出であるタドーシンテイン (Thadō: hsinhtein:) と結婚していた。彼らの間にはヤーフラー (Yāhulā) という息子とシンソーデー、ソーウンマという2人の娘ができたが、タドーシンテインが没した後、ソーミン・コードーデーはミン・ピャウ (Min:-pyauk) というシャン族の首長と再び結婚したが、彼はパガン王家のナラテイハバテ王の妃ボワソーの姉の孫に当るのであった。ミンピャウは妻の権利によってテイハバテイの称号を以て王位にあげられた。その後、娘ソードーウが生れた。タガウン王族のものと想像される彼の継子ヤーフラーはタドー族の出であったので、タガウンの町を治めるためにそこに派遣され、タドーミンビャー (Thadō: min: byā:) の称号をとらえた。このタドーミンビャーは次のインワ王朝を建設する初代の王となるのである。

サガインの王位に即いたミンピャウは、前述した通り、正統の王家には属さなかった。その正統の王家でない者が王座に即いていることはピンヤのナラトウ王には不愉快でたまらなかった。そこで北方に住むモーシャン族 (Maw Shan) の根拠地であるモーガウン (Mō: gaung:) の90万

シャン族の主と呼ばれたゾーハンボワの弟ゾーチボワ (Tho hkyi hpwā:) に「サガイン王家を倒せ、援軍を送ろう。もしそれが成功すれば、サガインの良いところだけを汝が取って、つまらないところを我れにあたえよ。」と云った。ナラトウに使喚されたゾーチボワはまずタガウンの町を襲った。タガウンを守っていたタドーミンビャーは抗し切れず辛うじてタガウンを脱出してサガインに逃れた。ところが彼の継父ミンピャウは彼の敗退を怒り、彼に鉄の足枷をかけて、チャカッワヤーへ送り幽閉した。モーガウンの首長ゾーチボワは成功に余勢を駆って大軍をひきいてサガインに現れた。ミンピャウは都の放棄を余儀なくされ、南の方チャカッワヤーへ逃走した。サガインを襲ったゾーチボワは逃げおくれた2人の老人を除いては残されたものはなく、何の利益も得られなかったので失望し、ナラトウ王が約束通り彼を援助しなかったという理由で、今度はピンヤに戦いを挑んだ。都は掠奪され、王は虜となって、シャン州へその白象とともに拉し去られた。1364年であった。その後、このナラトウはモーパー・ナラトウ (Maw-pā Narathū) (モーシャン族に連れ去られたナラトウ王) とあざ名された。

上ビルマの住民のなかにはシャン族の奴隷の群れに投げられることを恐れてタウングーに移住する者が多かった。

ピンヤでは、ナラトウ王が連れ去られたので、その兄ウザナー・ピャウンがソーウンマを妃として王位に即き、ピンヤ6代目の王位を継いだ。ソーウンマはチョーゾワング、ナラトウ、ウザナー・ピャウンの三代の妃となった。パガン時代にチャンジッターの太妃キン・ウも三代の王の妃となっている。

一方、ミンピャウがサガインの都を放棄したので、住民は彼の勇気の缺乏に深く不満を感じた。彼はチャカッワヤーにいるタドーミンビャーの許に走ったが、タドーミンビャーはかねてより彼に恨みをいだいていたので、その継父を殺害した。タドーミンビャーは次いでピンヤ占有を決意し、ウザナー・ピャウンを襲って彼を亡ぼした。ウザナー・ピャウンは僅か3カ月間王位に即いたのみであった。ここにおいてタドーミンビャーはソーウンマを王妃として、ピンヤを支配した。ソーウンマは4人目の王妃となった。

かくして、タドーミンビャーはミン・ピャウとウザナー・ピャウンをしりぞけ、サガインとピンヤを占領した。1364年カソンの月（大体日本の5月に相当する）にサガインは亡び、同年ナヨンの月（大体日本の6月）にピンヤが亡んだ。

タドーミンビャーは昔のタガウン王家の後裔であると信ぜられ、彼の母ソーミン・コードーデーを通じ、サガインのシャン族の王アテインカヤーの孫であった。今やシャン族の系統に属していた王たちは亡びて、ビルマ族に属していたタガウン王家のタドーミンビャーがその王となった。彼の野心は彼をして当時幾多の小国に分裂していたビルマ王国の復活を刺激し、彼は直ちにこの事業に着手した。

彼はピンヤにて6カ月間支配した後、1365年（ビルマ暦726年）タバウンの月（大体日本の3月）にビルマ史上有名なインワ (In:wa) 王朝を築き、その初代王として知られた。

インワ王朝の創設はビルマ史家のうちには西暦1364年（ビルマ暦726年タバウンの月）となっ

ているのもあるが、ビルマ暦726年タバウンの月は実際には西暦1365年に当る、何故ならば、学報12号、106頁及び18号、81頁に述べた通り、ビルマ暦（即ちパガン暦）を西暦に換算する場合、ビマル暦に638年を加えるのであるが、1月1日より4月15日（ビルマの正月）までの間では639年を加えなければならない。タバウンの月は日本の大体3月に当るので、1365年としなければならない。従って、サガインとピンヤの両王朝が亡びた年とインワが始まった年はビルマ暦では同じ年であっても西暦では1年の差が生じてくる。

ハーヴィではタドー・ミンビャーの性質について次の通り述べられている個所がある。

「タドー・ミンビャーはある山賊を殺し、その胸腔を皿として食事をとったと言われるが、彼ら酋長たちの中にはこういう人物も珍しくなかったのである。彼は自分の競争者を除くために自己の一族をことごとく屠り去った。（これはインドシナ諸国の王廷における常套の筆法である。）」（Outline of Burmese History, p. 61）

ビルマ人が現在のビルマの地域に定着するまでには10数世紀間にわたる異民族とのあつれぎがあった。ビルマ国の中心となるべき諸大河の最も肥沃なデルタ地帯はモン族によって占められていた。また上ビルマにあっては約240年間にわたるシャン族の支配を受け、アラカン族の反抗があり、南詔国（雲南）の強圧下に苦しんだりしたことがビルマ人をしてますます団結を固め、民族国家組織完成への気運を高めたのであって、この意味において、民族意識の強烈なビルマ人の今日あるは、当時の民族的諸事象にその淵源があると見ても差し支えあるまい。

参 考 文 献

- U Hpo Kya: Myanma Yāzawin Akyin, 1937
U On Maung: Myanma Yāzawin Thit, 1953
U Min Han: Myanma Naingnandaw Hket-laik Yāzawin, 1937.
Hman-nan: Mahā Yāzawin Vol. I
G.E. Harvey: Outline of Burmese History, 1947
D.G.E. Hall: Burma, 1950
U Hpō: Lat: Thutethana-that-yot-pya Abhidhān, 1955.
ハーヴィ著 } ビルマ史, 1943
五十嵐智昭訳 }
アーサー・フエヤー著 } ビルマ史, 昭18年
岡村武雄 訳 }
シュエヨー著 } ビルマ民族誌
片山真吉 著 } 南方民族運動史
Chas. Duroiselle: Notes on the Vessantara Jātaka Vattu, 1917
Judson's Burmese-English Dict., 1953.
U Tint Swe: Pawrāna Kahtā Abhidhān, 1954.
Ledi Pandita: Pāli Abhidhān Hkyup.